

Title	日本におけるグラフィロジー成立の背景に対する考察
Author(s)	佐伯, 和香
Citation	デザイン学論考 = Discussions on studies of design (2018), 14: 26-29
Issue Date	2018-12
URL	http://hdl.handle.net/2433/235911
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

日本におけるグラフィロジー成立の背景に対する考察

Consideration about the background of graphology establishment



佐伯 和香

SAEKI, Waka

京都大学大学院経営管理教育部サービス&ホスピタリティ専攻修士1回生
京都大学デザイン学大学院連携プログラム6期生

1. はじめに

同じ文字を知っているにも関わらず、人がその文字を表記すると、その形に多少の違いが現れる。グラフィロジー（Graphology、筆跡心理学）とは、そのような筆跡の違いから書き手の性格や運命を知ろうとするものである。筆跡から書き手の性格を知ろうとすることは、血液型から性格を知ろうとするよりも信憑性があると感じるが、日本ではあまり人気がなく発展していないように思う。しかし、フランスのようにグラフィロジーが発展していて重視されている国もある。文字は様々なことを記録する手段として、人にとって身近なものであった。身近な文字に関連するグラフィロジーは、文字を持つ全ての国で盛んになるのが自然であると考えられる。なぜこの違いは起こったのだろうか。

2. フランスと日本におけるグラフィロジー

本章では、フランスと日本におけるグラフィロジーの位置づけについて、根本の文献ⁱを元に拝観する。グラフィロジーは世界の様々な国で研究されているが、フランスやドイツは盛んなことで有名である。特にフランスでは、グラフィロジスト（Graphologist、筆跡診断士）の第二種は国が認定する国家資格であり、第二種を持っていないければ司法関係の筆跡鑑定を行うことができない。また、大学の課目にも、グラフィロジーが存在し、企業においては、入社前に応募者の筆跡を診断し、採用かどうかを決めることもあるⁱⁱしかし、日本においては、グラフィロジーはフランスと同じぐらい発展してはいない。フランスとは異なり、日本では誰もが筆跡鑑定士、筆跡鑑定人を名乗ることができる。主に警察が行っている司法関係の筆跡鑑定についても、同様に行うこ

ⁱ 浜本隆志、柏木治、森貴史(2008)『ヨーロッパ人相学：顔が語る西洋文化史』白水社

ⁱⁱ 根本寛(2015)『新筆跡鑑定』三和書籍

とができる。また、日本において筆跡鑑定は、遺言書を本当に本人が書いたのかを特定する時や、個人の性格を特定する時などにも用いられるが、字体から将来を言い当てる、占いの一種のような用途で用いられることもある。日本ではフランスと異なりグラフォロジーが体系づけられていないのはなぜか。この理由には、日本語の特徴、歴史的な背景が関係していると考えられる。

3. グラフォロジー成立の歴史

3章では、浜本らの文献ⁱⁱⁱを元にグラフォロジー成立の歴史を拝覽する。

ヨーロッパではアリストテレスの時代から観相学（人相学の元となる）があったものの、人相は神が予め定めたものであり、人相学は神を冒瀆するものであるとのキリスト教の影響により排斥されてきた。しかし、ルネサンス期の古典の復権により、イタリアで観相学が復活し人相学は再び用いられるようになった。その後フランスへ輸入され、フランスにおいても人相学（*Physiognomy*）が盛んになった。人相学で用いられる考え方が筆跡にも使われるようになり、グラフォロジーが確立したと考えられる。

1622年にカミーロ・バルディが筆跡と人格との関係について、「すべての人は独自の書き方をしている、他のだれも真にまねることはできないこと、くりかえし現れる特徴を注意する必要があること、書く材料にも注意すべき」と詳しく述べた本を出版している。その後、19世紀に入り、フランスのアベ・フランドリが学問的証明はないものの、筆跡と性格特性の関係を調べている。

彼の弟子、ジャン・イポリート・ミションは、19世紀以前までに行われていた筆跡に対する研究に捉われず、多様かつ膨大な筆跡を集めることにより、「符号理論」を確立したⁱⁱ。筆跡にある印があれば、性格に特徴があると考え、筆跡にある印がなければ正確に特徴はないと考える理論である。また、ミションは筆跡研究をグラフォロジーと名付け、その後筆跡についての研究はグラフォロジーと呼ばれるようになったⁱⁱ。

ミションの弟子、クレピュー・ジャマンは、筆跡の特徴を175細目に分け、それらを性格の特徴に結びつけることで、科学的に体系づけた。同時期に、イタリアのロンブローゾは精神病患者の筆跡について研究し、精神病学の研究に筆跡が貢献できることを立証している。

また、この時期以降、フランスとドイツでは普仏戦争などによる政治的離反^{iv}により、グラフォロジーはフランス学派、ドイツ学派の二派に分かれていき、

ⁱⁱⁱ 浜本隆志、柏木治、森貴史(2008)『ヨーロッパ人相学：顔が語る西洋文化史』白水社

^{iv} NHK高校講座、https://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/sekaishi/archive/2015sekaishi_27.pdf (2018年12月7日閲覧)

1895年以降ドイツ学派はフランス学派の影響を受けなくなり、独自の発展をしていく。その頃のドイツ学派では、プライヤーが有名である。プライヤーは、手で書く文字だけでなく、足や口で書いた文字についても研究した。その結果、どの文字にも個人の特徴が表れることが明らかになった。プライヤーは、文字は脳が支配する運動によるものであると考えた。また、同じドイツ学派にクラークスがいる。クラークスは、筆跡成立の全要因を考えることが必要であると主張した。例えば、インキの違いや、書く速さの違いなどから、筆跡と性格の関係を発見した。

一方、日本では人相学は中国から導入され、運命鑑定や性格占いとして平安時代以降盛んになり、室町時代には天山阿闍梨が『先天相法』としてその体系を本にまとめた^v。その後も現在に至るまで人相学については多様な本が出版されている。しかし、そこからグラフォロジーの確立には至らず、1964年に出版された『書の心理』（黒田正典）によって初めて集成される。

4. グラフォロジー成立の違いについての考察

フランスと日本におけるこの違いには、文字数が関係していると考えられる。フランス語の文字数が26字^{vi}であるのに対し、日本語はひらがな、カタカナ合わせて約90字、常用漢字だけで約2000字あり、捨て仮名なども含めるとさらに多くなる。そのため、フランスでは筆跡の特徴に注目することは日本語の筆跡に注目するよりも容易であり、それらを性格と結びつけることが可能であったと思われる。

また、日本では6世紀（聖徳太子の治世）から写経が始まり、その後書道も始まった^{vii}。日本においては、本などに書かれた文字を書き写し、その文字を手本に近づけることが求められ、そのために個人個人の文字に多様性が表れにくく、文字から個人の特徴を識別する考え方は生まれにくかった可能性がある。現代においても、文字は手本を意識して書かれるものであると考えられていることが義務教育から明らかであるように思われる。学校図書^{viii}、教育出版^{ix}、三省堂^x、東京書籍^{xi}、光村図書^{xii}（平成30年度の文部科学省が指定している教科書の出

^v 石本有孚(1998)『人相学大全』新人物往来社

^{vi} 東京外国語大学言語モジュール、<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/fr/pmod2/1-3/1.html> (2018年12月7日閲覧)

^{vii} 名児耶明(2009)『決定版 日本書道史』芸術新聞社

^{viii} 学校図書、<https://gakuto.co.jp/> (2018年12月7日閲覧)

^{ix} 教育出版、<https://www.kvoiku-shuppan.co.jp/> (2018年12月7日閲覧)

^x 三省堂、<https://www.sanseido-publ.co.jp/> (2018年12月7日閲覧)

^{xi} 東京書籍、<https://www.tokyo-shoseki.co.jp/> (2018年12月7日閲覧)

^{xii} 光村図書、<http://www.mitsumura-toshco.co.jp/> (2018年12月7日閲覧)

版社^{xiii})では、小学校の国語の教科書はトメ、ハネの形が分かりやすい教科書体
が使用されている。小学校、中学校では、書写、書道の授業で手本に近づけた文
字を書くことが求められている。この考え方も、グラフィロジーの成立がフラ
ンスより遅れ、あまり発展していない理由であると考えられる。

制度の違いも両者の違いに影響を与えていると考えられる。日本においては、
義務教育では教科書を用いながら文字や数字などを学習する。しかし、フラン
スでは、義務教育で教科書を用いることは教員の自由であり、1/4の授業でのみ
用いられ^{xiv}、教科書の使用頻度は日本と比べ少ない。教科書にある同じ字体の文
字に捉われないことで、筆跡の多様性が生じやすく、グラフィロジーの確立が
進んだ可能性がある。

5. おわりに

フランスも日本も文字を持つてはいるが、フランスでは日本よりグラフィロ
ジー成立が早く、現在も多様な場面で用いられるぐらい活発である。このよう
な違いが生じるのは、グラフィロジーの成立に多様なことが影響を与えている
からである。グラフィロジーの成立には、筆跡に何らかの意味を与えるような
考え方(観相学)が存在することが成立には必要であるし、それを筆跡に当ては
めることも必要である。また、文字数、文字をどのように表現してきたのか、な
どはグラフィロジーが盛んになるかどうかに影響を与える。そのため、文字は
身近に存在するものではあるが、グラフィロジーは、文字が存在すれば必ず成
立し、盛んになるというものではないのである。

「デザイン学」への問い

- + 好まれている文字の形には何か共通点があるのだろうか
- + 文字の形、文字の意味はどちらがより強い印象を与えるのだろうか

^{xiii} 文部科学省、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/_icsFiles/afieldfile/2017/04/26/1384989_001.pdf
(2018年12月7日閲覧)

^{xiv} 国立教育政策研究所、http://www.nier.go.jp/seika_kaihatsu_2/risu-2-206_france.pdf (2018年12月7日閲覧)